

令和5年度秋田県産業教育審議会議事録（要旨）

1 日 時 令和5年11月14日（火） 13：10～16：00

2 開催場所 秋田市立秋田商業高等学校

3 出席者 委員13名

山村 明弘（秋田大学大学院理工学研究科 教授）
眞壁 聡子（国際教養大学国際教養学部 教授）
佐々木信行（矢島木材乾燥株式会社 常務取締役）
荻原慎太郎（協和石油株式会社 代表取締役）
小畑 宏介（株式会社友愛ビルサービス 専務取締役）
村上 亜紀（株式会社共和 取締役）
境田 未希（株式会社境田商事 取締役）
阿部 円香（株式会社杳 代表取締役）
佐藤 大祐（秋田県農林水産部農林政策課長）
佐藤 裕之（秋田県産業労働部参事(兼)産業政策課長）
谷村 格（秋田県中学校長会 会長）
渡辺 勉（秋田県高等学校教育研究会農業部会 会長）
佐藤 隆史（秋田県高等学校教育研究会工業部会 会長）

4 日 程

(1) 開会行事

- ・教育委員会挨拶
- ・参加者紹介

(2) 学校紹介

- ・学校紹介
- ・生徒発表 「Sixth Industrialization From AKISHO ～売れないものに付加価値を～」

(3) 審 議

【テーマ】 高等学校における産業教育の改善・充実策について
～デジタル社会に対応できる人材を育成するための産業教育の在り方～

5 審議概要（要旨）

議長

D X化に対応する人材育成、地域に貢献できる人材育成に関して先生方からご意見をいただきたい。

2つのポイントがあるが、相互に関連している部分もあれば必ずしも関連している訳ではないという見方もある。ひとつずつお話をいただき、後ほど少し関連性を含めて、提言等をまとめていく。また、昨年度からの変化として生成A Iの登場がある。私が生成A Iの話を聞いたのは昨年11月頃だが、1月、2月には結構話題になり、当初は生産性向上やプログラムの自動化という産業界における生産性の向上が謳われていたが、今となっては少し違う方向に進んでしまった感があり、教育界ではレポートの自動生成という部分もある。今日は授業観察があったが、あのようなポスターも今後は生成A Iに作らせるという観点も出てくるかと思う。教育界では、むしろポジティブな方向で生成A Iをどのように使うかということで検討を始めているところである。我々、大学ではまだ具体的な方策としてポジティブに生成A Iを使う方法ということ始めている訳ではなく、我々としてはなかなか難しい部分があるかと思う。

情報系はとにかくスピードが速く、なかなか我々がそれに追いつくのが難しいところではある。D X化を広げるためだけでなく、それで何をやるのか、どういったところで変革を起こすのかということに関して、秋田県には少子化や高齢者といった課題もある中で、どのようにD X化で対応できるかという話をお伺いしていきたい。

新任の委員の皆様も多いため、意見を言い合えるような形で進めたい。D X化に対応できる人材育成ということで、特に産業界、高校教育においてD X化に対応できる人材育成として前年度はI C Tの指導を提言し、それを実現しているということだが、更に新たな提案や高校教育でこういうことをやってはかがか、ということ委員の皆様からご提言いただきたい。

A委員

私は商業高校の授業を参観したことがあまりなかったため、先ほどの授業参観に非常に驚いた。

授業を参観する前に今日の審議テーマをいただいたが、大きなテーマは産業教育の改善・充実策であった。改善や充実を図るためには、何を目標しているのかというゴールがはっきりしていれば、その目標に向かってどのような手立てで指導をすべきなのかが具体的に見えてくると思う。何を目標しているのかを考えたとき、それぞれ学校教育で目指すもの、しかも今テーマになっているデジタル社会に対応できる人材というのは専門によって違うかと思う。普通科の生徒であってもいずれは社会に出ていく訳で、どこまでの力・スキルを身に付けて卒業するか目標がはっきりしていなければ、そこに到達するための方策や、今やっていることの充実や改善というのは難しいのではないかと思う。

高校卒業までにどのような力を身に付けさせたいのか、議長からもあったように、情報化の進展というのは非常に目覚ましく、今どこまでやるかという目標を決めたとしても、またすぐに目指すところが変わってきたりもする。日々変わっていく、進展していく情報化に、卒業後も自分でそれをフォローできるような、それについていこうとする、または自分が就いた仕事によって学び続けていこうとする、いわゆる学びに向かう力、そういった態度が必要ではないか。D X化に対応できる人材育成と一言と言っても簡単なことではなく、やはり基本的なことを身に付ける、それを更に自分でブラッシュアップしたり自分のスキルを伸ばしていく、あるいは情報を入れ替えたりと学び続けようとする気持ちや態度が大事

なのではないか。

議長

学び続ける力・リスクリングに関しては、特に情報技術の場合は日々変わってしまうため、A委員のおっしゃるように、世の中はリスクリングの機会を提供している。自分で学ぶ能力を身に付けられればいいかと思う。
続いてB委員。

B委員

先ほど校長先生の学校説明や生徒さん5名の発表、それから授業を参観させていただいた。非常にわかりやすい説明で良かったと思う。何よりも5名の生徒さんたちが非常に礼儀正しく、入ってくる段階から私も背筋が伸びる思いをして、このような感覚は久しぶりであった。礼儀正しく大変良かった。

説明の中で、商業高校ならではの部分もあったと思うが、ほとんどが商業高校のレベルを超えているような感じがした。従来であればモノを売って利益を得るような話が商業高校でのメインかと考えていたが、今日の説明では第一次産業の生産部門に踏み込んでいたり、あるいは加工分野にも踏み込んでいたりしており、必要に応じて現地の専門家の方々に赴いて様々な情報を調べてプレゼンテーションを作成している。非常に感動を覚えるようなレベルであった。

私もよく県外に出かける機会があり、秋田県の企業であれば秋田県のことを話すことがあるが、やはり人口減少の話題になる。秋田県の人口のピークは昭和31年、西暦では1951年で135万人。2040年には人口が70万人程度になる。100年も経たないうちに半減してしまう状況である。このような中で、やはり産業教育にもっと力を入れ、一人でも多く県内に留め頑張ってもらいたい。いろいろ工夫された学習により生徒自らがあのようなプレゼンテーションをしているということは非常に興味深く、また私自身も励まされるような感覚で参観していた。

議長

私もB委員と同様で、プレゼンテーションは非常に高いレベルにあったと思う。彼らは何を学び、どのようなことを身に付けたのかということ聞いてみたかったところであった。

また、B委員からは秋田の人口減少の話があった。これは確かに問題で、そのためにも産業教育の分野で秋田に残って欲しい。それは先ほどのA委員のご意見で、何を目的とするかということと、また少し別の目的にもなるが、やはり秋田という県における教育、やはりそういったことも視点に置かなければならないかと思う。

続いてC委員。

C委員

秋田商業高校の授業を初めて参観させていただき、本当に感銘を受け、また、びっくりさせられたというのが正直なところである。昨年は金足農業高校が会場校で、コロナの関係もあり別の会場での実施であったが、昨年度も生徒さんの発表があった。その中でも、農業は農業なりのDX化ということで、いろいろ説明されていた。そこまで進んでいるんだなという印象を受けたのを覚えている。

今年会場を秋田商業高校に移してということであるが、各学年ともここまで細かく指導されるのかという印象である。先ほどの生徒さんたちのプレゼンテーションも含め、今回はDX化がテーマということであるが、実際、これ以上やることあるのかと驚いている。

会社を経営させていただいている者であれば、この状態であればいつでも会社の方に来ていただける状況であり、あまりにも仕上がりがすぎているという感想ももった。また、今のデジタル化が毎年どんどん変わっている状況で、昨年よりも

教えている内容がどんどん進化しており、現在の最新の商業を学ぶ場なのだろうと捉えている。

例えば、先日から始まったインボイス制度は私たちが直面している問題であるが、プログラミングも含めてどんどん高校生の生徒さんたちに慣れ親しんでもらえるような環境を、もっと多く設けていただきたいと思う。

議長

続いてD委員。

D委員

先ほど授業を参観させていただいたが、大変ありがたい機会をいただいた。

また、学習発表もあったが、私は実践型・体験型の方が学びが多いと思う。以前は詰め込み型で、キャッチボールがなかなかない時代であった。現在は、お互い意見を出し合う、一つのテーマに向かってチーム性を磨くということは、体験する部分の学びが何よりも大きいと思う。我々企業のPDCAでいえば、計画を立てるのもチームであり、実行は個別になるかもしれないが、検証もチームで行うため、大変有意義なものになると思う。

もう一つ、それらとつながるのは、実践して自分に合うかどうかということもあるが、これは好きだなと思う部分にフォーカスした方がいいと思っている。先ほどA委員からもあった学びの継続によって、もたらされるものとして一番大切なものだと思う。100あるうちの1つでも自分が得意だと思うもの、好きなものを見つけられる場合は、やはり体験してみる、実践してみる、あるいは現地に行く、あるいはそこで五感で感じる学習が、その人にとって一番将来につながる可能性を見出せるのではないかと思う。今日、授業を参観させていただいたが、あの子がこう言った、この学生がこう言ったという中での記憶を含め、そのような実践型の授業は大変大切だと思う。

議長

この実践型に関しては昨年度も議論が出ており、高校教育課の方でうまく進めていただいていると思う。昨年度の審議も含め、D委員からはそういったことが非常に重要であるという話であった。言葉で言えばPBL、プロジェクトベースドラーニングと言ったりするのもかもしれないが、それが例えば、秋田のある企業ではできるが、他の企業ではできないとか、そういうところがあるかと少し思う。

続いてE委員。

E委員

私は、秋田商業高校の卒業生であるが、私の高校時代よりも大分進んでいると感じた。

先ほどA委員からゴール設定の重要性について話があったが、この部分は以前から継続されていると感じた。今回のテーマを読んだ際、私もDX化について考え、DX化に対応できる人材として7つ程度まとめてきた。それらが、今日いただいたリーフレットの秋商スタンダードに合致していた。リーフレットには秋商スタンダードというものが掲載されており、高校入学後、会計・流通経済・情報の各コースから興味のあるコースを選択し、自分でどんどん学んでいくというものであった。

また、生徒主体で授業を進めることも今後は必要なのではないかと思う。日本では、ディスカッション形式のものはあまりないかと思うが、そういったものも取り入れていくと自分の意見をきちんと言えるようになる。論理的に、自分はこう思うからこうしてみたい、みなさんはどう思うか。もう少しディスカッション形式を加えるなどすると、もっとDX、インフォメーションテクノロジー、コンピュータにしても、マーケティングの授業にしても楽しくなるのではないかなと

思う。更に、商業高校であればマーケティングにはもっと力を入れてもいいとも思う。先ほどの生徒さんの発表でも、最後に自分たちの取組の課題について、販路拡大に課題がある、プロモーションの工夫、自分の取組を知ってもらえるよう研究を進めたいという発言があった。そうしたら、これはソーシャルネットワークマーケティングしかないと思いながら参観していた。

議長

続いてF委員。

F委員

先程来、デジタル社会という言葉が出ており、おそらく仕事の在り方自体も変わってくるものと経営者の方の視点では見ている。その際に、今日の授業参観での専門高校の専門性・知識は非常に高いものが求められるのと同時に、その技術だけではなく、企業が成長していくために生かす全体的な視点、経営者と同じ立場での視点は必要になり、そういった能力も重視されると思っている。授業でいえば、基礎を学んだ上でそれをどう応用させるかという部分で、秋田県や秋田市という言葉が多く出ていたが、企業の立場での視点も必要になってくると思う。

授業参観でもう一つ思ったのが、皆さん画面に向かっての授業が多かった。その授業で追いつけなかった生徒たちの対応も、デジタル社会の一つの教育現場の問題ではないかと感じている。私の子供は小学生だが、小学校に入学する時でさえ保育園と小学校の教育の問題が出ており、中学校から高校に入る時点で産業教育という比較的専門性の高い部分を選んだものの、そこで差がついてしまったときに、社会に対してその生徒たちのもつイメージというのを教育現場として、歩幅をある程度見極めていかなければならないと思う。

とても早いデジタル社会の進みがある中で、私たち自身ですら付いていくのに必死である。頭の柔らかい生徒たちはそれが当たり前として受け入れるかもしれないが、社会に入ったときに生徒たちには差があるのも事実だと思う。その差を社会で実際に経験させ、失敗させ、先ほどD委員からあったようにPDCAに基づいて応用させるという取組が必要で、それが果たして秋田だけでいいのかと、もう少し県外を見てもいいのではないかと、早いうちから県外を見る視点をもたせることも必要な部分なのかなと感じた。そこでは、地域に貢献できる人材というものにつながっていくと思い、今もここで意見を聞かせていただいている。

議長

F委員から、企業が成長する視点ということとして、いくつかあったかと思う。企業の視点から言えば県内だけを見てはだめで、モノを売るのであれば県内だけではいけない訳で、やっぱり外にも向かなければならない。

そういったことや、授業についていけなかった生徒、ICT関係の技術についていけなかった生徒のフォロー、それも二極化にかかる教育の一つの課題であるというご意見があった。後ほど先生方からご意見をいただけたらと思う。

続いてG委員。

G委員

今回初めて秋田商業高校の授業や生徒の皆さんの発表を参観し、実践的な財務諸表を学んでおり、私もそのまま授業に参加したいくらいの授業で大変感激している。

DX化という言葉に関しても、他の委員の皆様からもあったとおり、とにかくデジタル技術がどんどん進化し、それに対応していくことが必要ということだと思うが、確実に変化していくけれども、その中で確実に変わらないベースとなるものが少なからずあるのではないかと感じている。それを秋田商業高校で学んでいるらっしゃるのかもしれないが、今後、現れるであろう変化に対応するためのべ

一スづくりと変化に対する柔軟性を予測できるような授業ができればいいかと、仕事目線で恐縮であるが、そのように思う。

議長

変わらないベースになるものという話があった。先ほどから出ている学び続ける力やヒューマンスキル、むしろデジタルスキルなのか社会人基礎力なのか、そういった部分はやはり必要なかと思う。

続いてH委員。

H委員

DX化に至るまでの今の世の中を見渡して考えたとき、今日の授業を参観しても思ったが、何かビジネスをやっている、ビジネスの工程ごとにそれぞれ課題があるときに、課題に正面から自分で何でもかんでも取り組んでいくという時代ではなく、その課題を解決してくれるようなソフトウェアやサービスが基本的には大体あるというのが現在なのではないかと思う。それがあるからこそ、これから必要になっていく力というのは自分がやっているビジネス活動に対して、どのような課題があって、それごとに今どのような既存のものが存在するのかという、そういう全体像を俯瞰できるような人材を育成していくことが必要ではないか。ここで特に強調したいのは、あくまでも俯瞰できる人材であって俯瞰して更にマスターできる人材というのは、これはもう神童であり、ほとんどいないと思う。こういう神童レベルを育成するのは極めて現実性がなく、あくまで全体を俯瞰した上でこの分野は自分で徹底的に勉強しようとか、ここは勉強するまでもなく大体理解できていればよく、あとは誰かに頼って教えてもらおうとか、世の中に解決できるようなツールがいろいろある状況の中で、学び続けるにしてもどこを重点的に学び、どこは少しだけ理解しておいた方がいい程度の学びという、優先順位付け能力のようなものが必要になってくると思う。それを考えると、一つの分野に特化して活動していると意外とその分野のことしか知らず、当たり前前の解決ツールが別の分野にあるのに知らないということが当たり前にあると思う。農業は特にそうだが、農業分野の人が他の分野の人と交流するような場面、こういうものがあればあるほど、こうやって解決すればいいんだというのが学ぶことができる。異分野同士が交流するメリットは以前と比べても現在の方が高くなっているのではないかと思っている。今回六次産業化という農業寄りのテーマで探究していただいているのも、大変いいことだと思う。今後も学び続けるというよりは異分野交流のようなものを社会に出てからどのように作っていくかということが非常に大事になっていくと思う。

議長

学ぶことに優先順位をつける能力という話や、俯瞰できる人材、だけでもそれを完全にマスターしている訳でもない人材。これはいろいろな意見があるかと思う。いろいろな審議会に参加していると、やはり一つのことに特化した人材というのは求められている。私も大学で企業様からお話いただくが、採用担当者の意見では、一つのことをきちんとできる人は会社に入ってからでもできるとか、そういう言い方をされることがある。実際、H委員からお話しがあった農業関係で、例えば、前はドローンの話が出ていたと思う。やはり、農業でも全然関係ないドローンを使用したりとか、リモートセンシングをやるにしても、いろいろなやり方があるのだと思うが、それを知ってるかどうかというのは、やはり俯瞰する力、そういったものが必要であるということがご意見なのかなと思う。まさに異分野との交流をどうやって図っていくかということは、そのような仕組みはおそらく世の中にはないかと、どちらかという目敏くそれを見付ける人が、うまく勝っていくというような状況があるかと思う。H委員のご意見は、そういう

力を身に付けた方が良いということかと解釈した。

続いて I 委員

I 委員

今回、一つ目のテーマになっているDX化、デジタル化ということについては、私も産業労働部の中にデジタルイノベーション戦略室という組織を設け、基本的にはそちらで対応している状況である。昨年も少しご紹介させていただいたが、県では中・高生の段階から、こうしたデジタルの取扱い・DXといったところに関心をもってもらい、産学官で育成していくことが必要であるという基本的な姿勢に基づき、学校で行っている授業とは別に、実践的な学習がどのように課題解決に結び付いていくのかということを経験してもらおうということで、秋田DXクラブ活動で希望する高校に手を挙げていただき、DX・デジタル技術を活用して興味のある生徒が取り組んで理解を深めるとか、経験を深めていくということを経験している。実際に事業を進めていくと、各高校の情報分野に造詣が深い先生や、熱心に取り組まれている先生にどうしても事業が偏ってしまう部分もあり、今年度からは中学校まで対象を広げて実施している。また、学校の枠を越えて個人的に興味をもち取り組みたいという生徒向けに、秋田デジタルキャンプ事業を今年度から実施しており、11月上旬の連休で開催した。当初は30名程度の参加を見込んでいたが、全県から100名を超える応募があり、抽選で40名程度が参加した。県内のデジタル推進ということでは大きく2つの柱があるが、一つは県内情報関連産業の振興、県内の高校生や大学生が就職するための受け皿ということでも非常に有力な分野であり、ここを振興して成長産業として更に発展させていく。もう一つは、IT企業等ではなく、一般企業でもデジタル化はこれから必要になる。そのような県内各企業のデジタル化をどう進めていくかということである。県内情報関連産業の振興と、そこを目指す若者を育てていくことが一つと、県内各企業のデジタル化がもう一つ。デジタル化がなかなか進まない原因として費用の負担も当然あるが、社内でデジタルを取り扱える人材がいないことが大きな要因になっている。先ほどH委員からお話があった、本当にマスターのような人ではなくても、ある程度自分の会社の中でデジタル的な分野を理解し、その企業に必要な部分がある程度こなせるというような、そのような意味でのデジタル人材が、それぞれの企業に必要なのかと思っている。その部分については、本日、秋田商業高校で参観した指導で、ある程度基盤を作れると考え非常に心強かった。先ほど議長からお話があったが、我々の方でIT企業の経営者等に聞くと、特定のスキルについては仕事に就いてからでも覚えられる、重要なのは社会人基礎力や人間力の部分だと、声を揃えている。また、基本的スキルを身に付けていただくと同時に、この後の地域に貢献できる人材と重なる部分もあるが、身の回りのいろいろなことに興味をもち、主体的に取り組んでいく若者を育てていくということが重要かと感じた。

議長

県の施策として情報系企業を増やしていくというのは、大きな目標になっているかと思う。なぜデジタル化が進まないのかということについては、原因としてはI委員からもご説明があった。本大学でデジタル化が進むのかとか、数理・データサイエンス・AI、これは文部科学省が進めているものであるが、教える人材がいるかということ、そういう訳でもない。実際の研究という観点でも、実はAI化とかデータサイエンス化に対応できなければ新しい研究ができない。ところが、今の現状ではそういうレベルになっていない。やはり保守的な考え方が、秋田にはあるのかなと思う部分もある。首都圏や関西の大学では、そこら辺をすぐに突破するというかジャンプしてくるような気がする。地域の大学はどうしても

保守的で、今まで通りというところがある。それがデジタル化が進まない原因でもあると思う。10何年も前に首都圏ではS u i c aが使われているのに、秋田ではいつまでも使われていない。今でも、大曲駅より向こう側では使えないとか、やはりそういうところを直さなければならない。そう考えるとデジタル化が進まないというのは、仕方がないのかなという気がする。

続いてJ委員。

J委員

秋田県教育委員会発行の学校教育の指針を参考にしながら、お話する。7ページをご覧ください。秋田県の子供たちに付けさせる力は、生きる力である。これは、先ほどA委員からもあったように、ゴールではなくねらいだと思っている。生きる力を身に付けることにより、情報社会、混沌とした世界情勢の中で、子供たちが力強く生きていく力が育まれていると思う。議題には地域に貢献できる人材育成があるが、本県ではふるさと教育を推進しており、県内全ての小・中学校で行っている。ここから育まれるふるさとの良さや愛着心・郷土愛、そういったものが意識的に喚起され、いずれ今の秋田県の子供たちが秋田県から離れても秋田県を愛する気持ちは、失われないと確信している。では、そのベースとなる教育は何かといえば、地域に根ざしたキャリア教育である。キャリア教育というのは何かというと、8ページに地域に根ざしたキャリア教育の充実をあげている。キャリア教育のねらいは、基礎的・汎用的な能力である。人間関係形成能力や社会形成能力・キャリアプランニング能力などいろいろある。これを中学生に、今勉強しているのは社会形成能力だよ、と言っても分からない。高校生なら分かるのではないかと思いながら、授業参観した。先ほどの秋田商業高校の発表の中で、課題を見出し、仮説を設定し検証して結果を出していた。私は、これを全ての授業で行うべきだと思う。今日行っている全ての授業で、子供たちに仮説を立てさせ検証させる。そのような学びの中で何ができるかということ、7ページに戻り、秋田県では問いを発する子供の育成というのをやっている。要するに、疑問があったら、なぜだろうという問いを発す子供の着眼点に注目させる、という授業である。これは県内どこの学校でも行っており、秋田商業高校のグループ学習を参観して、もっとメリハリがあってしかるべきだと思った。中学生の方がもっとメリハリがある。それだけ時代が変わってきていて、今は一人一台端末で子供たちの方が先生方より技能の向上が進み、サクサクッとタブレット端末を活用しているような状況である。残念ながら50代、60代の先生方は追い付かない。20代、30代の先生たちが主体的に行っている現状である。だからDXに対応できる人材育成は、もう10年もすれば、明らかに子供たちが当たり前のように推進していくのではないかと思っている。

議長

続いてK委員。

K委員

農業高校ではスマート農業という形になるかと思うが、大型自動センシングの農業機械を購入するには非常にお金がかかるため、学校で導入しすぐ学校の体制に取り入れるということは難しいのが現実である。ただ、いろいろなメーカーからの協力を得ながら、学校でそれを試運転させていただき生徒たちが実際に動かしてみ、時代はこういう形なんだよとデモンストレーションをしているのが現実である。私はそういう方法でいいと思う。先進的な機器はすぐに古くなるため、農業高校に配置されても5年程したら使い物にならない、無駄なお金の使い方はしたくないと考えている。授業の中でDX人材ということであるが、先程来から話があるように、どんどん先に進んでおり生徒にはいろいろなアクセス方法があ

と思う。一方が駄目だからといって、もう終わりではないと思う。これが駄目になったら次というような形があると思うので、いろいろなテクニックを身に付けて自分で一番やりやすい方法でやっていると思うので、その力を伸ばした方が面白いと思う。スマート農業も結果的に収量を上げ、いいものを作るためにいろいろな方法がある。そのような探究する力を身に付けさせるべきだと思う。先日、県内の職業系・専門系高校の産業教育フェアの事業として、体験研究発表会を本校の大講堂で行ったが、県内の農工商等の専門高校がいろいろな体験発表や研究発表をしてくださった。本当に各校とも面白い、本当にいい研究をしている。審査員として、秋田県立大学の先生においでいただいたが、大曲農業高校の発表は指導講評や審査をするにしても、一定レベルを超えているとお話をいただいた。大曲農業高校の生徒たちが、田沢湖の酸性水を用いたブルーベリー栽培のための農業資材の開発について調査・研究をして失敗を繰り返し、ある程度の成果を得たことを発表したが、その研究過程が本当に素晴らしいと評価をしてくださった。そういった高校時代の研究活動が将来に役立ちますね、という話をしてくださり、生徒たちの自信につながったところであった。そのような形で、一生懸命頑張っている農業高校生がたくさんいる。

議長

続いてL委員。

L委員

本校は工業高校であり、デジタル教材が授業や実習で多く使われている。例えば機械科であれば、1年次に3DCADを使い、部品の立体図面を作成する。そして、2・3年次でNC工作機械にデータを入れると機械が自動的に部品を削るという実習が行われている。その隣では、実際に古い旋盤のような機械で、生徒は実習服を汗と油だらけにして削っている。リアルとデジタルの両方を体験させるという特徴がある。また、電気科では昨日の自習中の話であるが、生徒が端末に向かい一生懸命データの入力中であった。実は担当教諭は九州へ出張中であり、九州から生徒一人一人の端末に課題を出し、生徒は自習時間で調べ学習をして、端末で問題を解いていた。それをレポートとして、自習時間のうちに九州にいる担当教諭に送信するということを行っていた。今の生徒は、普通の授業や活動の中でデジタルへのハードルがほとんどなくなっている。デジタル人材の育成は、今、行っていることを継続させることで対応できると思う。企業に入れば自然にデジタル力が進化していくと感じている。

議長

それでは、二つ目の地域に貢献できる人材育成の方にお話を変わっていきたいと思う。

こちらに関しては、秋田県は少子高齢化が進んでおり、どうやって若者を引きつけていけばいいのか、高齢化してきている年配の方のお世話をどのようにしていけばいいのか、いろいろな課題があるのかと思う。また各委員の先生方からご意見を伺いたい。

それではA委員。

A委員

本学の秋田県出身者は各学年20名程度であり、ほとんどが他の都道府県からの入学者だが、多くは自分の地元や首都圏に就職する。よくマスコミでも報道されることがあるが、わずかではあるが他県から来た学生で、秋田県の我々でも気付かないような魅力に気付き事業を起こしたり、今あるものを生かして新たな事業を生み出している学生もいる。秋田県にいる人たちが気付かないところに、外からの目で気付いてくれているということは非常に喜ばしいことで、数は少ないも

の大きな力だと思っている。

先ほど、校長先生から地元で貢献できる生徒を育てたいというお話があった。いただいた学校要覧には卒業生のうち就職した68名中50名が県内就職をされており、非常に高い割合だと思っている。どちらかというと、専門高校でも農業や商業は地元で就職する方が多いイメージがある。ただ、地元で貢献できるというのは、必ずしも県内に残って貢献するだけではないと思う。県外に出ても、どこに行っても貢献できるということかと思う。また、本学で秋田県から入学してきた学生がプロジェクトをやったりする際、秋田のことについて取り上げる学生が非常に多くなっている。先ほどJ委員からも出ていたように、小さい時からのふるさと教育というのは本当に染み付いている。仕事で貢献するだけではない部分もある。

議長

県内に残らずに県外に出たとしても、秋田県への貢献はあるということですね。私もそう思う。いろいろなところから来て、秋田との交流をその方が一生続けていければ、いろいろ形での秋田のPRを外でやってくれたらいいと思う。

続いてB委員。

B委員

まさに今、A委員がおっしゃったとおりだと思う。

私は県内大学でのイベントに参加した際には、県外からの学生に対し秋田の特産物をPRしているが、地域の名産や特産品等の他に誇れるものを発信し、地域に貢献できる人材をぜひ作っていきたいと思っている。

議長

地域の特産品を発信できるような人材ということかと思う。今日は、秋田商業高校の生徒さんたちも作っていたと思うが、そういった活動が広がっていったらいいと思う。

続いてE委員。

E委員

秋田商業高校の話題に戻るが、私は自己紹介の際に必ず秋商生ですと話します。これは自分の誇りでもある。秋田は意外にグローバルだが、先ほど、議長からもあったように、少々コンサバティブな部分がある。地域への貢献や地域経済の発展につながるには、秋田に対する誇りが大切であり、それが現在の秋田商業高校の教育にも感じられる。誇りの部分の発信も大事なのかと思う。

議長

続いてC委員。

C委員

先ほども話があったが、まずは中・高生に秋田の良さを見つけてもらいたいと思う。また、就職に関しては高校生を食い止めたということもあるが、今の時代は、どうしても出て行きたいという人も多いのが現実である。そのことを考えれば、企業者は、県外に出て行った人たちがまた秋田に戻ってこられるような環境づくりをやっていかなければならないと思う。また今、DX化でいろいろ情報が飛び交っているが、秋田の良さをより多く発信し秋田のものを提案して見てもらえるような環境づくりも大事になるのではないかと思う。

議長

C委員のおっしゃる戻ってくるということについては、私自身は人間が生まれたところずっとそこに留まり、他の世界に出ていかないというのは、きちんと成長するのかなと思う部分もある。やはり他の文化等を見た上で戻ってくる方が、会社経営としても経験豊富な人の方が良いということはないだろうか。

続いてD委員。

D委員

私は地域という定義が大変広いと思う。秋田だけという考え方ではなく、東北や日本のためにというスケール感をまずはもったほうがいいと思う。我が誇る秋田県であれば、例えば、落合監督や中嶋監督に関して秋田出身だから一緒と感じる人は少なからず地域に貢献していると思う。そういった気持ちをどう育てるかという話になるが、これは県外の人との交流だと思う。

価値観の共有について、グローバルは世界共通で一緒と言うが、実はインターナショナルな人を増やすということだと思う。沖縄の人と九州の人と秋田の学生が会ったとき、どういう化学変化を起こすかといえば、お互いの良いところを知ることだと思う。我々が海外に行くことと同じように、そういった経験があれば必ず地域のことを好きになる、というスケールではないかと私は思う。

議長

多様性を受け入れるという部分が大事であるという話であったと思う。D委員からあったように、その通りだと思う。

続いてF委員。

F委員

先ほど秋田商業高校の学生さんたちの発表での、地域で出たB品・C品を使うことも地域貢献だとは思いますが、これくらいの利益が出ましたと発表していた。その利益で次に何をするかということを考えることこそが、本来の地域貢献につながっていくのではないかなと思う。自分たちが得たものを次にどのように使うかということは、経済を回す上でとても重要で自分たちの自己満足ではなく次につながる仕組みを生徒たちがつなげていくことで、地域がつながっていく意味で大事になると感じている。

私が体験学習の子供たちに常に伝えている秋田の良さというのは、秋田の小ささだと思っている。小さいからこそ決済や物事の動き方が早い。それをもう少し私たち産業界が次を担う方々に伝え、秋田の良さを一つにして欲しいと感じている。

議長

続いてG委員。

G委員

私自身、秋田は学びたいことや娯楽がないため県外に出た典型的なタイプだが、一度県外に出たからこそ気付けたものが多くあり、戻ってくることができた。いろいろな関係性を築く中で本当にいいものは何かを考え、地元のものや風景・文化が本当にいいものだと気付くことができたからこそ、私は戻ってくることができ、今、事業をやらせていただいている。弊社は宿泊業がメインだが、実際に暮らしている人が地域を楽しめる場所だと自信をもって言える機会の提供を地域貢献としてやっていきたいと思っている。

私は、一回外に出て何かショックを受けて帰ってきて欲しい。そういう学生とのつながりを、これから築いていきたいと思っている。

議長

本当に大事なものは何かに気が付いて戻ってきてくれるということかと思う。
続いてH委員。

H委員

この10数年程の教育改革の中で総合学習ができ、小・中学校で地元のことを知る場面も増えてきている。そういった分野に、一次産業が果たしてきた役割は大きかったと思う。

文部科学省の最新の議論では、小・中学校で身に付けた地域との関わりを高校でも、という流れができおり、以前と比較しても地域に貢献したいという思いをもつ人が増える教育ができてきている。

次の改善・充実策について考えたとき、例えば農業高校生向けに先輩農業者の声を聞く場面や講演を国の事業を使ってやっているが、講師はやはり常連が多い。県内を見渡しても、高校生向けに話せる人は、この法人やこの人なんだと見えてきている。魅力ある人がいる地域を拡大していくという視点で、地域産業を持つ部局と一緒に部局間連携ができてくると、地域に貢献したい人材が活躍できる地域の数が増えていくと思う。

議長

続いてI委員。

I委員

今の話にもあった地域に貢献できる人材育成について、教育の方はいい流れという話であったが、ふるさとへの愛着や秋田への関心・思いをもってもらう教育はされていると思う。我々としては、秋田に留めておくとか秋田に帰ってきてもらうために、受け皿がないという訳にはいかない。それは我々がいかに官民あげて頑張るかということだと思う。

働く場ということに関しては、小・中学生の段階から企業紹介や企業体験を各地域で取り組み蓄積され、意識が改善されてきていると思っている。

今、もう一つ取り組もうとしているのが、地域のために貢献したい、自分で起業したいという若い人が出てきているので、そういった人たちをバックアップすることである。地域で新たな事業として成功させていけるのか、ビジネスとして成り立つように、我々産業部門としては、その支援をしっかりとやっていきたいと思っている。

議長

小・中学生からの県内企業紹介はかなり充実させているということで、これは本当に必要だと思う。県内に何があるかを知ることが大切だと思う。

起業に関しては、ここで話さなければいけなかったかもしれないが、これはまた、今後の課題になるかと思う。

若い人が秋田県内に新しいものをどう作っていくか。こういった部分に、教育界に何ができるのかというのは少し難しい。アントレプレナーシップのような精神的なものは言えるが、こういったところは今後の課題かと思う。

続いてJ委員。

J委員

先程来、皆様から話があったように、小・中の教育を高校につなげる、いわゆる連結点のようなものがあればいいなと思いを伺っていた。

以前に出席した全国公立学校教頭研究大会での講話が印象に残っており、地元高校生に地元で活躍している身近な先輩を呼び講話をしたところ、生徒たちが生き生きと話を聞いたという話であった。委員の皆様が本校OBであるならば、是非話をしていただければ、子供たちが秋田で活躍している先輩たちを身近に感じ、地元で貢献しようという意識をもてるのではないかと感じた。

議長

やはり先輩の話だと聞き方が違うという話だと思うが、まさにその通りかと思う。

続いてK委員。

K委員

いかに地元に残すかという形の話になるが、農業高校であれば地元の産

業を知ることが一番の近道なのかと思う。本校では、できるだけ地域に生徒を出しインターンシップや現場実習といった形で指導をいただいている。更には講師としても来ていただき、地域との交流を深めるようにやっている。

学校は閉ざされた空間となりがちだが、私はどんどん地域とコラボレーションするよう話している。実際に、面白いことをやっている人たちもおり、良い刺激になるものと思っている。

また、本校卒業生の県内就職率は90.7%であり、大仙・仙北地区は全体的に高く10校程あるが平均で78.9%、特に大曲地区は高い印象である。

議長

外部講師に来ていただくなどの交流が大事だということかと思う。

続いてL委員。

L委員

本校でも、社会に開かれた教育課程ということで地元の企業や官庁との連携を深めている。現場見学や出前授業等で、地元の魅力を伝えることが一番大切なことと思っている。

地域ということでは、県内就職にばかり目が行くが、大手企業ではできる限り最初は地元に着任させる試みもなされている。県外就職という枠組みで数えられても、県内で働いている人が結構いる。また、県外へ出た人がいろいろな人脈を作りながら、知識・技能を蓄えて地元に戻ってくる。このようなAターン事業にもっと力を入れていくべきだと思う。

議長

高校生のうちに秋田の魅力を十分埋め込み、外に出るとしても帰ってきていただく生徒さんをつくるという仕掛けと思われる。

ここまで、先生方からいろいろなご意見をいただいた。

特にDX化の方に関しては、DXとは何かというものもあり、今回はデジタル技術の推進と捉えていたように思う。実践型、特に授業のカリキュラムにないので、会社の方と一緒にやるようなことは、非常にモチベーションを生むのではないかという話があった。社会人基礎力ではないが、自分が好きなことをどうやって見つけていくか、そういったことを授業の中で見つけていくことが大事だというお話もあった。

地域に貢献できる人材に関しては、秋田の魅力や秋田プライドという言葉が出ていたが、それをいかに高校生、十代の若いうちから身に付け、他県に行ったとしても戻ってこられる、他県に対してそれを発信していける人材を作っていく。そういった教育、ただ単に秋田が好きだというだけではなく、それを外に発信するような人材作りが必要かと思う。

長時間の審議ありがとうございました。審議としては終わりたい。